

相馬の歴史を探求する

# 凸凹新聞

2024年  
1月号  
Vol. 5

発行：相馬凸凹学会

石マニア・木村の相馬探訪その②

メノコが潜んでいた洞窟跡？  
野崎観音堂（湯口）



## 相馬の神社の謎と秘密（2）



階段を下り鳥居をくぐると、そこは木々に囲まれたひっそりとした空間でした。まるで何者が身を隠すかのように.....。



祭神は勢至・観音菩薩  
脇に小祠：不動明王  
庚申塔 文化8年  
青面金剛像庚申塔 文化5年

この観音堂は本当に分かりにくい場所にあり、県道129号線から一本脇道に入ったところに鎮座していました。黒滝地区と思い込んでいましたが、黒滝と湯口の境目で住所は湯口になります。車から降りて捜索すると、短いガードレールがあり下に続く階段を発見！



『相馬村史』によると、このあたりは石戸神社の伝承に出てくるメノコという首領が潜んでいたという「クロイ滝」、「ま淵」のあったところだそうです。その昔、この地域が野崎村だったから野崎観音堂なのでしょうね。そしてクロイ滝が変化して黒滝という地名になったのでしょうか。すべて想像でしかありませんが、相馬のミステリアスな探検はまだまだ続きます。

凸凹新聞  
2024年1月号 Vol. 5（2024年1月26日発行）

◆発行者  
相馬凸凹学会（代表・加賀新一郎）  
〒036-1592  
青森県弘前市大字五所字野沢41番地1  
（弘前市相馬庁舎内）  
電話：090-3102-6110（地域おこし協力隊）  
E-mail：souma.chiikiokosi@gmail.com

【参考文献】  
三浦稔『わがふるさと』、相馬村誌編集委員会編『相馬村誌』（相馬村）、鳴海恒男『相馬村史』（津軽書房）

# 相馬の伝承(1) オオスケ・コスケ



大助地区を流れる作沢川。現在でもサクラマスなどが遡上する (©Google Earth)

## かつては相馬にもサケが遡っていた

お正月はいかががお過ごしだったでしょうか。お歳暮やお正月の贈答品として新巻鮭を贈る風習がある地域は多い。相馬地区にそんな風習があるかどうかかわからないが、かつては相馬の川にもサケがたくさん遡上してきたのは確かだろう。凹凸地形の相馬には多くの沢が存在していて(それ

が相馬という地名の由来という説もある)、それらが集まり川となって地域内を潤していた。大小いくつもの川は岩木川に合流してやがて海に注ぐ。岩木川を通じて降海したサケやマスが、産卵のため相馬にも遡上していた。それらを獲って生活の糧の一部にしていた人々もいたようだ。そのサケにまつわる伝承が、相馬の大助(おおすけ)地区界隈に残っている。いくつかバージョンがあるが今回は「怖いバージョン」を紹介しよう。

## 大助地区に伝わるオオスケ・コスケ伝承

大助地区に流れる作沢川にも昔はサケがたくさん遡ってきたようだ。そのサケにまつわる次のような話が伝わる。サケが遡上する秋から冬の季節になると、近くの山に隠れ住んでいた鬼が夜な夜な作沢川に現れる。そし

て、「オオスケ、コスケ、今のぼる!」と叫んではサケを手づかみで獲り食らうのだという。

本当に恐ろしいのはここからだ。この光景を目撃したり鬼の声を聞いたものは、たちまち血を吐いて死んでしまふ、と伝えられてきた。だから川仕事をすると人は、この季節は夜に外出することをせずじっと家の中で過ごしたのだという。

なお、オオスケとはサケの雄のことで、コスケはその妻。毎年、サケが夫婦で川を遡ってくると思えられた。

じつは、オオスケ・コスケの伝承は東北を中心にいくつかの地域で語り継がれており、それぞれバリエーションがあつて内容が少しずつ異なる。

共通しているのは、オオスケ・コスケが夫婦であるということと、鬼やサケそのものまたはその精霊を見たり声を聞いたりすると死んでしまふ、ということ。要するに、この時期はあまり川に近づくな、と戒めているのである。

## 相馬の伝承に息づく自然への感謝と畏敬

なぜこのような話が伝えられたのだろうか?

学究的な考察はともかく、個人的な印象としては、つまるところ漁のやりすぎを戒めるものだったのではないかとと思う。魚を必要以上に獲つてはいけなく、サケの産卵をできるだけ妨げないようにするべし、さらには、働きすぎないように体をいたわりなさい、そんな忠告を込めた、自然の恵みと地域の人々を守るための説話だったのではないだろうか。

大助町会の地名がこの伝承に由来するかどうかは、わからない。旧大助村はもと尾助村といい、江戸時代中期の享保十一年(一七二六)の郷村改革で大助村となった。

いずれにしても、オオスケ・コスケ伝承には自然とともに生き、その恵みに感謝し、敬い続けてきた相馬の人々の思いが投影されているような気がする。

(文責・加賀新一郎)

## 【参考文献】

菅豊『鮭をめぐる民俗的世界—北方文化に見られる死と再生のモデル』(日本エディタースクール)、三浦稔『わがふるさと』、相馬村誌編集委員会編『相馬村誌』(相馬村)、鳴海恒男『相馬村史』(津軽書房)

## ●相馬凹凸学会とは

津軽平野の南端に位置し、台地と平地が入り組んだ凹凸地形の相馬の歴史を地形・地理・地名といった新たな視点も加えて調査・研究・記録するサークル。